
Story.01 白のプレリュード

麻生柚葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Story・01 白のプレリユード

【Nコード】

N6112M

【作者名】

麻生柚葉

【あらすじ】

傍に置いて欲しかった。ずっと一緒に居たかった。笑いかけて欲しかった。
愛されていたかった。貴方の一番でありたかった。存在を忘れて欲しくなかった。

沢山沢山願いがあつた。我侬かもしれないけど沢山の願いが。

だけど、本当に一番願っていた事はね。

ただ、『貴方に生きていて欲しかったの』

叶わなかった願いが砕けたとき、壊れた心が最後の一滴の涙を流し

ました。

それは全てのプレリユード

00・Prologue (前書き)

しろとくろ Story・00 Overture の続きの
お話になります。

00・Prologue

この物語を

私の願いが沢山詰まったこの物語を

親愛なる君に送ろう

どうか、どうか

最後まで読んで欲しい

どうか、どうか

最後まで見捨てないで欲しい

どれも愛しくて、どれも大切に

どれも自分の手のひらから零したくなくて

捨てられなくて、切り捨てられなくて

我侭ばかりの私は、大切な愛する人の幸せを願うよ

だけど、もし自分自身の願いを言って良いのなら

沢山の建前と、沢山の虚無に彩られた心の奥底で
たった一つだけ、私の願いが叶うならば

ただ、私はもう一度君に

会いたい

00・Prologue (後書き)

最初のPrelude

白黒共通

Chapter 1 Prelude 01・紅に捕らわれ

暗い暗い暗い・・・

まるで終わりの無い永遠のように広がる闇の中に幼い子供の泣き声が聞こえる

大きく声をあげるではなく、抑えられずしゃくり上げるでもなく

ただ泣き方など知らず、無意識に零れ落ちるような声が暗闇に響いていた。

誘われるがままに声のする方へ足を進めていた。

何が急かすのか分らないまま足はどんどん速く進んでいくそれに加えて、早く早くと心臓の鼓動がが急かされていく

（ああ、関わりたくなど無いのに）

心の叫びが虚しく響く

もう、何も要りはしないのに

希望も絶望もいらぬ。新しい変化など求めない
救いなど落胆など欲しくはない

（なのに、どうしてこの足は止まらないんですか）

目の奥が熱い、チリチリと力が疼いているのが分る

ボロボロの布着れを纏った、小さな塊。

ボサボサの伸び放題の髪の毛に、強く掴んだらすぐに折れてしまい
そんな手足の子供

体を小さく丸めて顔を埋める姿はより一層小さく見えた

「

」

零れ落とすように掠れた声で何か呟く

喉が張り付いてきちんと音になっているのか分らない

心臓の音が煩くて、自分自身の声が聞こえない

（やめて、お願いだから、やめてください）

声が届いてしまったのか、子供はのろのろと顔をあげる

心の中でどんなに拒絶しても子供の動きを止められず、体は金縛りにあつたように動けない

（嫌です、いやだ）

目の前に広がる紅紅紅

薄汚れたその体軀には似合わない異色の紅の色

見慣れぬ色に思わず息を呑む

輝きを失っても尚綺麗過ぎた暗闇に映えるその宝石に、ただただ畏怖覚えた

二つの紅が二つの蒼を映した時

目の奥の疼きが今まで味わったことの無い針をさすような激痛に変わる。

苦痛に眉を歪めても、逸らすことも瞳を閉じること出来ずに紅に魅せられ捕らわれる

動けない体でやっとの事で詰めていた息を吐き出すとドクリと心臓が波打ち、病が、呪いが、大きすぎる力が・・・

体を蝕むのが分った。

嫌な汗が、恐怖が止まらない

子供はそんな様子に気付く事は無く小さな口を開く

「

」

声は聞こえない。否、聞きたくなかった。

直後あまりの激痛に耐える事が限界で、声にならない悲鳴をあげながらそのまま意識を手放した

（逃れられる事は・・・できないのか）

その吸い込まれそうな穢れ無き紅に、涙など一滴もありはしなかった。

Chapter 1 Prelude

01 紅に捕らわれ（後書き）

穢れなき紅に捕らわれる
紅と書いて“アカ”と読む

02・夢の跡に思う

「・・・っ！」

恐怖と痛みで飛び起きた

目の前に広がるのは見慣れた白い天井のはずなのに、目がチカチカして別物に見えた

手を瞳にあてて閉ざしてもチカチカは収まらなかった。

体が重い、心臓が煩い

胸の前の服をきつく握り締めて痛みと鼓動が落ち着くのを待つ

「はあっ、はあ・・・」

（落ち着け・・・落ち着け・・・まだ・・・、夢だ）

そう、“まだ”

幾度も幾度も未来の夢を見た事がある。

物心付いた頃からの付き合いのコレは、きっと生まれつきの力なのだろう。

だけれど、こんなにもはつきりとした恐怖を感じる夢は初めてだ。

そしてどう頑張っても変えられない夢は初めてだ。

違う行動が出来ないし、声を出すことも出来ない

これが、逃れられない運命だとも言うのかだろうか

「ははっ、は・・・」

思わず口から乾いた笑いが零れる。

（アレに・・・忌み子に会いに行けと？）

自分に何の関係があるというのか

あんな恐ろしいモノに会いに行けというのか

天界から忌み嫌われる存在、夢に見て恐怖感じる存在に。

先の短い私に何をしろと言うんだ

自嘲と共に息を吐き出す

考えても無駄か。夢は見せるだけ見せて何も語らない。

夢で見たとおりに行動しても大胆に違う行動をしたって、それが正しいか間違いかなんて夢は語らない。

好きなだけ多様な未来を見せ付けるくせに

どれを選ぶか、理由を探して意味を付けるのはいつだって自分だ。

（考えても仕方が無い事なのか）

最近この夢を見る頻度が高くなってきている。

もうそろそろ、夢が現実になる時だ。

まだ、自分の納得のいく理由を見つけ出してなどいないのに

すでにカウントダウンは始まっている。止める事など出来はしない。

あの恐怖を現実で体験する日は近い

夢で予告されてる分、ましではあるのだろうけれど

でも、

（ああ、嫌だな・・・）

心構えなど、恐怖に立ち向かう勇氣など
強さなど持ち合わせていない

「はぁー」

大きなため息と共に顔に張り付いた前髪を掻き揚げる
涼しい氣候に反して夢の続きとでも言うように汗だくで、パジャマ
も汗でびっしょりベタついていた。

（ああ、もう！）

心臓と目の奥の痛みが和らいだと思ったら、今度は不快感が湧き上
がってきた。

気持ちが悪い。一番にシャワーを浴びなくてはいけない。

煩わしく思いながらも、サイドテーブルに手を伸ばす。

少し重みのある懷中時計で時間を確認するともう昼に近かった。

重たい体を無理やり起こして、今日もまたつまらない一日が始まる。
ベッドから素足を下ろした床がやけに冷たかった。

02・夢の跡に思う（後書き）

痛みの伴う夢の跡に思う
奔走されては踊らされる

03・金系雀に花を

良くも無く悪くも無い天気の中、葵は一人悠々と散歩をしていた。気分が良いから少し遠出しようかとも考えたが、面倒くさいからや
はり止めた。

目に見える変化などいない。

ずっとずっと不変であればいい。

そんな馬鹿みたいな事をいつだって望んでいる。

今の自分に絶望などしていないから、希望など救いなどいない。
別れがあるなら、出会いはいない。

(・・・本当に、馬鹿みたいだ)

変わらないものなどあるのだろうか

自分の行動一つにしても日々同じよう違う事をしているのに。

考え事をしていても足は勝手に慣れ親しんだいつものコースを歩く
手には墓に供える為に摘んできた小さな花を持って
これはもう体に染み付いてしまった日課だ

独りぼっちで育ってきた葵にとって唯一の光

(あの子達の存在は、あの子達との出会いは私にとって奇跡だった)
今は亡き大切な存在。

あの子達と過ごした日々は本当に幸せだった。

風が吹いて、目の前でうっとおしく髪が揺れる

少し髪が伸びたかもしれない。そういえば前回髪を切ったのがいつだったか曖昧だ。

前髪が目に入って痛い。

前髪だけは帰ったらすぐ切らなければ駄目かもしれない。

他の天使が自分と絶対に目を合わせようとしない事は知っている。

普通は体の外に輝く天使の力の源であるサフィアが、悪魔のように体内にサフィアがある自分の事を天界の住人は疎んだ。

普通ではない自分を、天界は嫌った。

目の奥にサフィアがある事を知った天界はこの目を嫌った。

だからといって、隠してあげる義理はない。

どんなに非難されようと、ありのままの自分でいた

前髪で目を覆うことをせず、俯くことをせず

いつだって顔をあげて前を向いて生きてきた。

自分は強くなど無い。

逃げて隠れて諦めて生活している癖にそれだけは何故か昔から譲れなかった。

あえて言うなら、目が見えなくなるのが嫌だった。暗闇が怖かったんだろ。

その代わりに長い軟禁生活を送ってきたけれど、目が見えなくなるよりは何倍もましだった。

嫌われ疎まれ、閉鎖的な空間で育ったのによくもまあ、ここまで生きてこれたと思う

(・・・捻くれてる事は自分が一番理解しているけど)

一言で言えば、葵は運が良かった。

生まれてきた家も、親の性格も立場も、育っていく環境ももって生まれた力も

どれか一つでも無ければ存在を消されるか、追放か……
いずれにしろ今まで満足に生きて来れなかっただろう。

だけど、

（どれも嫌いだな。）

今まで生きてきて勿論悲しい事も辛い事も沢山あった。

けれど、嬉しい事も楽しい事も僅かながらあったから今までの人生
に後悔はしていないし不満も無い

しかしこれとそれとは話が別。嫌いなものは嫌いだ

歩く足を速めながら、感情を出す事無く持っていた花を強く握った。

嫌いだけれど、格段に恵まれているとは思っ

何故なら自分よりも普通ではない存在が生まれたからだ。

それがいつの事だったかは忘れてしまった。

だけれど情報に疎い葵でさえ可笑しいと思うほどに目に見えて天界
の住人の関心が一点に集中していた。

禁忌の紅い目。そして普通一つのサファイアが三つもある天使

今まで普通ではないと疎まれていた葵の存在が霞んでしまうほどに
それほどまでに忌み子の存在は天界を揺るがせる衝撃だった。

天界にとっては大問題で、現在も未だ存在を持て余している。

忌み子をどう扱うか色々な議論が飛び交うだけ飛び交って、処置は
決まっていらないらしい。

決まるまで監禁されて存在を放置されていると噂されている。

（何かと決断の遅い天界で、処置が決定する事などあるのだろうか

？)

生まれてからも、もう大々的に存在を発表されてからも大分時間が経っている。

いくら天使が長寿でも遅すぎる。すでにもう赤ん坊から幼い子供に成長している事だろう。

だけど忌み子には悪いが、その存在のお蔭で葵は良い方向に運が廻って来た。

軟禁生活が解かれ、相変わらず誰も目を合わせないが変な目で見られる事が無くなった

敷地内ではあるが小さいながらも自分だけの家に住めるようになったし、天界をうろついていても何も言われなくなった。

笑ってしまう位に変わった。

周りに対してなんて愚かなんだろうと少し残念に思った。
より普通ではないものを人は恐れる。

それは葵も同じだった。

例えば生活を変えてくれた事に対して感謝はする。けれど変化を願ってなかったのも確かだ。

だから、恐れる忌み子に対して何かする気にはならなかった。
関わりたくないというのが正直な思い。

・・・今までは

だから、これは

(これは今まで甘い汁を啜ってきた私への罰なのか・・・)

自嘲しながらも、忌み子のお蔭で作ることの出来たこじんまりとした小さなお墓に今日もまた花を供えて祈った

03・金糸雀に花を（後書き）

金糸雀に花を供えて

こんな私でも見捨てないでくれますか

04・迫り来る夢に

軟禁生活が強制的に終了してからというもの、葵は一天使として扱われる事となった。

名家というお家柄、何かと上役会議に参加する義務がある。

今までは代理や葵よりも序列が低いものが変わりに行っていたのだが、天界の目が逸れた事をこれ幸いと目をつけて仕事を押し付けてきた。

（本当に、面倒くさい・・・）

どうも退屈な仕事だ。

お偉い様が意見を出し合い、ああだこうだと議論する。

いくら立場が良くなったとはいえ。葵に発言権があるわけでもない。何度もある内に流石に仕事には慣れてきたけれど人と接することに慣れる事は無い。

無駄に知識は増えたが、自分が他人と違った考えを持っている事が浮き彫りになった気がした。

それが良い事なのか、悪い事なのか、葵には分らなかった。

今日もまた目立たない端の方の席に座りながら頬杖をつき、お偉い様のくだらないやり取りを嘆かわしく見ていた。

言いたい事をだけ言って話が纏まらない。

自分に不利な事があるとすぐ人に押し付けようとする。

怒声や罵声も混じりつつ、天界にとって一応は白熱した議論なのだろう。

この、『忌み子脱走』の件については

「ふわああ・・・」

（退屈すぎて欠伸が出るよ）

大きく開いた口を隠す事無く欠伸をするが、誰も葵を気にする者などいなかった。

殺せ！見つけ次第殺してしまえばいい！

一体誰が殺すんだ、逆に襲い掛かってきたらどうする。

議題の張本人様はどうやら脱走したらしい。

ご丁寧にも部屋の壁を爆発させて綺麗に穴を開けてから、颯爽と逃げ出していったという話だ。

ちなみに、見張りの連中は情けない事に恐怖で気絶していたらしい。

（揃いも揃って間抜けな連中だなあ）

今だからこそ、よくも今まで我慢したものだとは思うけれど生まれてからずっと監禁が普通で特に苦にも思っていないだろう

葵自身もそうだった。軟禁状態が当たり前だった為にそれに対して何か思ったことはない。

クーデターだテロだお偉い様は言っているけれど

真相は何かの拍子に力が暴発して壁に穴が開き、そこから見えた初めて見る鳥か何かに興味惹かれてついに行ったら迷子になった。

と言うところだろう。

今頃鳥も見失い、未知の場所に戸惑って不安一杯で小さくなっているのだろう。

頼る者も何も無く、疲れきって動けなくなつて

（経験しない限り、一生議論したつて分るはずが無い。この気持ちは・・・）

それに、力の暴発は忌み子に規則正しい不変な生活をさせていたのなら生まれてから今まで溜め込まれたものだろう。

ならば一度暴発した今、すぐにまた暴発するとは葵は思えなかった。だから、一番簡単な解決法は忌み子を見つけても決して近づかないと天界中に命を出しておく事だ。

刺激しなければ力はすぐ暴発しないだろうし、時が経てば何も知らない忌み子は勝手に衰弱して死ぬだろう。

（どうせ今までだつて最低限しか食事を与えてはいないだろうし。

何で、こんな簡単な事が分らないのだろうか。）

葵も環境一つ違っていたのなら忌み子の様な人生を歩んだかもしれない。

そうは思っても、葵は忌み子に対して憐憫も同情も沸くことが無かった。

いつまでも続くくだらない議論に苛立ちを抑えることが難しくなってきた。

葵は早く終われと念じた。勿論顔には一切出すことはしない。

なら、捕まえてまた監禁すればいい

そうしたら、また逃げ出すに決まつてる！根本的な解決にはならないだろう。

じゃあ、放置しろと言うのか、それこそ危険じゃないか……！

「恐ろしいなあ……、勝手に死んでくれれば楽なものな。そう思わね？」

自分の思考に浸っていると急に声をかけられた。
葵と同じく参加するだけで発言権も無い天使なのだろう。
その声は葵に聞こえる程度で小さなものだった。

（最近良く隣になるけど、名前は忘れてしまったな。）
天使らしいサラリと長い少しくすんだ金系の髪がキラキラしている
葵と同じくらいの青年だった。

（それにしても、笑いながら随分酷い事を言う）
自分も似たような事を頭で考えていたことを棚に上げて葵は思う
だけど、真っ赤になって怒声を響かせている天使よりは頭が回るらしい。

「……そう、だね。それが一番平和だ。関わらないのが一番良いよ。」

「だよなー。」

おつ、結局何も決まらないまま会議終わるみたいだな。」
つられる様に青年の目線を追うと

会場内で広く一番豪華な席から禿の目立つ天使が身を乗り出しているのが見えた。

会議終了を叫ぶ議長の声が遠くに聞こえてくる。

会議後の独特の喧騒と雑談のざわめきの中、青年も会議に飽き飽きしていたのか即座に席から立ち上がった。

「じゃあ、またなー！」

「うん。そうだね。」

妙にフレンドリーな隣席の彼に軽く手をあげるとニカッと笑顔を送られた。

（だけど、やはり名前は思い出せない。）

どうせ次の会議の時もきつとまた話しかけてくるのだろう。

物好きだと失礼なことを思うが、カラッとした性格の彼を葵は嫌いではなかった。

一人一人と腰をあげ退出する中、なかなか葵は重い腰をあげられなかった。

普段ならば先ほどの青年と同じく終了後すぐにでも立ち上がるところだけれど今日はそうもいかなかった。

くだらない会議が終わった事はとても嬉しいけれど、とても気が重い。

（夢が現実になる・・・この後、すぐにでも）

監禁されている場所ならば会う事は無かった。

けれど脱走した今ならば、会いたくないと思ってても会ってしまうのだろう。

関わる以外の選択肢を持っていなかった。

悪足掻きで天井を睨みつけてみるものの、葵に逃れる術を思いつきはしなかった。

04・迫り来る夢に（後書き）

変化を望んで迫り来る夢に

望んでなど無い先に抵抗する術は無し

05・救済か破滅か

黄昏時に一人慣れない道を足が動くままに進んでいた。

もう、すぐにでも日が落ちて夜が来るだろう。

自分だけの城に帰りたいと心は願うが、足は全く言うことを聞いてはくれない。

諦めに似た思いを持って歩いていった。

歩みにあわせて腰につけた懐中時計が存在を主張するかのように揺れる。

この先に何が待つのだろうか

忌み子の夢を見た日から、それより先の未来が見えなくなった。

(・・・死か。)

夢の通りに意識失った先が死だというのなら、なんと呆気ないことだろうか。

だが、違うとも思う。死ではないと。

意味を付けるのは葵自身だ。少しでもそう感じたから、先にあるものが死ではないと思いたかった。

足を進める度にどんどん目の奥が疼いてくる。

近づいていつている証拠なのだろう。

夢では気付かなかった事だけれど、求める様にも歓喜する様にも感じる。

その逆で、近づけば近づくほどに煩くなる心臓は近づくなとまるで警告するかの様に鼓動していた。

行かせるものかと体を蝕む呪いが暴れ回る。
息苦しくなる、体が重い。
だけど、足が止まることは無かった。

（もう、どうでもいい。）

葵は投げ出したい気持ちで一杯だった。
相反する警告をする体を持て余しながら、ただ進むだけ。

会議会場から家のある道を少し逸れて日の沈む方向へ
葵の作った二つの墓の裏手にある、よく見なければ分らない足場の
悪い獣道を通って
飛んでくる虫に顔を顰めながらも前へ前へ

慣れない荒れた道が歩きにくく、元々少ない体力を根こそぎ奪った。
滝のように流れる汗が鬱陶しい。

葵は苛々しながら前髪を掻き揚げた。

（気持ち悪い。シャワーを浴びたい。）

夢を見た寝起きのように汗で服はぐっしりしていた。

しかし、全く同じではなく苦しくての脂汗であり、恐怖からの冷や
汗ではなかった。

靴を泥で汚しながらも何とか辿り着いた先。
止まらず忌み子の元まで一直線だと思っていた足は何故か止まっていた。

「ここ・・・か。」
搾り出すように声を出した。

（こんな所であれば迷い込んでいるのか。）
忌み子の監禁場所よりは大分離れたところにあるのには少し驚いた。
あれにとって世紀の大冒険だったに違いない。

夜になり闇が迫る。

空を見上げると嘲笑うかのように綺麗な満月が葵の頭上にあつた。

（気分の悪さは最高潮。早く行かないと流石にもうきつい。）

そこは若干崩れかかった洞窟のようになっていた。

周りには鳶が生い茂っているし、パツと見では気付かないような場所。

よくもまあ見つけたものだと思心しながら、少し奥まっついていて普段寄り付かない場所だが、葵の家の持つ敷地内である事に思わず笑った。

自由がきくようになった足でなら思った以上にそう遠くない我が家へ帰る事は出来るだろう。

しかし、葵は進む事を選んだ。

ここまでわざわざ来て帰るのならば今までの夢も苦勞も報われない。
恐怖もあるが、怖いもの見たさもある気がした。

そして何より、この先に進まないという見ていない未来に進む事が怖かった。

見る事が無かった暗転した夢の先にも興味もあつた。

自分によく似た存在に会ってみたくなつた。あの紅を見てみたいと

思った。

夢で何度も経験した所為か、痛みも苦しみも麻痺しているような気がした

恐怖も麻痺してしまつたような錯覚に捕らわれた気がした。

音が急に遠のいていくような気がした。

苦勞した獣道に茂る木々の音も鬱陶しいと思つていた虫の音も。

懐中時計を耳に当ててみても自身の心臓の音に負けて音が聞こえなかった。

全部“気がした”だけだけれど、そう考えるだけで葵にとっては本当になつた。

目の前がチカチカしてきたけれど、月の眩しさをそのまま映した様に明るかった。

（なんだか、楽しくなつてきた・・・気がする）

そして、葵は夢とは違い恐怖で歪む顔では無く、無意識に笑つて洞窟へ一歩を踏み出した。

05・救済が破滅か（後書き）

その一步は、救済が破滅か
早く来て、行かないで、お願いだから

06・紅との出会い

洞窟の中を気分的には軽い気持ちで進んでいく。

実際の足は限界を超えているため酷く鈍足なのだが。

夢の中では先の見えない暗闇に恐怖したが、満月の所為か洞窟は思いの外明るく、目がチカチカしている所為もあつてか暗く感じなかった。

葵の身長よりも少しだけ高い位の小さな洞窟は土砂崩れなどで出来たものでは無いようだ

小さな割には年期が入って頑丈そうだった。

心臓の音がやけに煩いのは気持ちが高揚しているからだろうか。
煩わしいくらいに鳴り響いていた警告音とは違った気がした。

++*+*+*

(この先・・・この先に・・・)

逸る気持ちに反比例して纏れる足。

倒れないよう壁にもたれ掛かりながら進む。

洋服は酷く汚れるけれど洞窟の岩はひんやりと冷たく、汗ばんだ体

に心地よかった。

奥に進むたびに煩くなる心臓の鼓動。

夢の中では忌み子の泣き声が聞こえたのに、心臓の音が煩くて聞こえなかった。

どの位歩いたのか時間の感覚が分らなかった。

確かめるために懐中時計を開く気にもなれなかった。

ずるずると足を引きずるようにして、それでも止まる事無く前へ前へ
目的を忘れそうになるほどにふわふわした心地の中で
進む事続けていた結果、ようやく葵は視線の先に薄暗い似合わない
薄汚れた小さな白い塊を発見する事ができた。

(・・・居た！見つけた！！)

ボロボロの布着れを纏った、小さな塊。

ボサボサの伸び放題の髪の毛に、強く掴んだらすぐに折れてしまい
そんな手足の子供

やはり、体を小さく丸めて顔を埋める姿はより一層小さく見えた

ゆっくりと慎重に歩みを進め忌み子の前に立つ。

近くで見れば見るほど小さい。

ジロジロと観察してもそのまましゃがみこんでも葵の存在に気付かないようだ。

(声をかければ、この子は私に気が付く。・・・だけど)

夢の中の自分はなんと声をかけたのだろうか。

幾度同じ夢を見ても自分の意思では無く零れ落ちたその音を聞き取る事は出来なかった。

葵は一度深呼吸をしながら考えてみるけれど、適した言葉が思いつく事は無かった。

「こんにちわ。」

結局苦し紛れに出て来た言葉は、ただの挨拶だった。

掠れた声で紡いだ言葉は、小さいながら空気を震わせ零れ落ちる音とは違った。

顔は笑顔を作れてはいないだろう。見る事など出来ないが大分変な顔をしている気がした。

葵の声が届いて、忌み子はのろろと顔をあげる

ボサボサの長い髪の奥に、不似合いな色がある。

二つの大きな無機質な紅い目が葵を見詰めた時、どこかに置き忘れてきた恐怖が痛みを伴ってやって来て葵を貫いた。

葵はビリつと感電したかのように熱を感じ体が一瞬跳ねた後、人形のように体を動かす事が出来なかった。

怖いと感じた。

その目が。禁忌のその色が。

喉が張り付いて息が上手くできない。恐怖で呼吸の方法が分からなくなる

忌み子はそんな様子に気付く事は無く小さな口を開く

「や あ . . .」

忌み子の声を認識した瞬間、痛みが鋭さを増した。

（現実では声が聞こえるのか・・・）

暗転する意識の中で最後に考えた事はそんな馬鹿げた事だった。
ちゃんと声を聞きたいのに、痛みが邪魔して聞こえない

近づかないで

そう、拒絶の声が聞こえた気がした。

06・紅との出会い（後書き）

“初めての”紅との出会い

限界を超えて夢見がちだった思考が一気に醒める瞬間

07 氷が溶けた日

痛い、痛い・・・

凍えそうに寒い

痛い・・・

(・・・痛い?)

永遠と広がる暗闇の中、突き刺す痛みが戻ってくる。

何かに急かされるように徐々に徐々にはあるが、痛みとそして寒さが葵を襲ってきた。

(死んで・・・いないのか)

痛みを感じるのならば、まだ生きているのだろう。

辛うじての気はするが。

みゃー

どうやら、夢の続きは存在するらしい。

先の知らない未来に進む事は久しぶりの感覚だった。

思い通りに行かない体に苛立ちを覚える。

手も足も自分のものでは無いみたいだ。懇親の力を込めても指先が僅かばかり動いただけだった。

どの位の間、意識を失っていたのだろう。

長いようにも、一瞬のようにも感じた。

ゆるゆると重い瞼をこじ開ける。

（何か、居る）

生理的な涙の所為かばやけて視界が歪んで見えた

（・・・忌み子・・・か）

こんな奥まった場所に態々足を運ぶものは居ないだろう。その前に見つけれないと思う。

仰向けに倒れこんだ葵を覗き込むようにしているのだろうか。

上から気配を感じる。

忘れかけていた呼吸を意識して繰り返すと、それにあわせて目の前の物も揺れた。

みゃー

数度瞬きを繰り返し、ようやく正常通りとはいかないものの視力が戻ってきた。

「・・・っ！」

忌み子との思いの外近い距離にギョツと目を見張るも二つの紅は葵を映して離さなかった。

輝く宝石の中に生気の無い驚き顔の葵の姿が映る

パチパチと音が聞こえそうな程大きな瞬きをして、その目には葵と同じく驚きの感情が宿っている気がした。

つられてパチパチと真似する様に葵も大きく瞬きをすると、不思議と心が落ち着いた。

ああ、何を

（・・・何を恐れていたのだろう。）

瞬きによつて零れ落ちる涙が固まりきつた思考を流していく気がした。

鈍っていた思考が一気に晴れていった。

葵の目の前には恐ろしい紅い宝石では無く、小さな小さな子供が居た。

倒れる前よりも近くに座り込み、不思議そうに瞬きする子供が居た。心臓辺りの服を強く握り締めた葵の右手の上に小さな二つの手が重なっていた。

冷え切った体に小さな温もりが心地よい。

分っているつもりで、全然分かつてなどいなかった。

結局は葵自身も怒声を響かせる愚かな頭の固い天使達と同じだった。何も見えていなかった。

あんなにも心の中で他の天使達を笑っていたくせに、恐れるものと決め付けて見てしまっていた。

目の前に居るのは、何も知らない小さな子供だ

空いている左手を無理やり動かして、目の前のボサボサ頭を撫でてやる。

とても温かかった。撫でれば撫でるほど手が、心が温かくなる気がした。

最初はキョトンとしていたものの、忌み子に優しい気持ちが伝わったのか目を細めて気持ち良さそうにした。

笑顔とはいえない。少し歪んだ表情。

忌み子も葵も似たような表情をしていた。

（・・・どうして、忘れてしまっていたのだろう）
今は亡き愛しい黒い猫の瞳と同じ色を輝かせていた。
紅は大好きな色だった。自分が持つ色とは反対の色。
全ての物を反射するように輝いたその色はとても美しかった。
そして、好意には好意を、悪意には悪意を。
鏡写しのようなその態度は今は亡き愛しい青い鳥の仕草と一緒にだった。

大切なあの子達の教えてくれた温かい気持ちを、心地よい温もりを
葵は忘れてしまっていた。

「・・・っ、は、ははっ・・・」
涙が零れる。痛みからの涙ではなく、心からの涙が零れる。
ぐちゃぐちゃの泣き笑いの表情が忌み子の目に映る。
自分でも気付く事のできなかった心の重みが軽くなっていく気がした。

全てが、馬鹿みたいな愚かな勘違いだった。
怯え、恐怖に揺れる目。全てを拒絶し、何も映さない目。
忌み子はそんな目をしていると思った。その目に葵は言いよつの無い恐怖を感じた。
それをしていたのは葵自身で、鏡である忌み子の目にその感情を映させてしまったのも葵だった。
蔑まれ拒絶され、その後急に普通扱いされて、振り回されて
限界に近かったのは葵の方だった。

気付かないくらい心の奥底で寂しくて誰かに傍に居てほしいと願っ

ていたのは、葵だった。

この小さな生き物に自覚させられた。
いつだってそうだ。

葵を救い上げるのは、自身でも気付かない傷を無意識に癒してしま
うのは葵よりも年を重ねていない小さな生き物達なのだ。

「みゃー」

言葉を知らない忌み子が鳴く
まぬけな鳴き声に笑いが止まらない。

「ははっ！あはは・・・」

優しい気持ちで一杯になった
温かい気持ちで一杯になった
失って、忘れかけていた気持ちで一杯になった

穢れ無き無垢なこの生き物が

愛おしい

そう自覚した瞬間、痛みに苦しみ重かった体が瞬く間に軽くなった。

07・氷が溶けた日（後書き）

気付かぬ氷が溶けた日に

失いかけていた愛しさに出会った

怯えていたのは忌み子ではなく葵のほう

救われたのは忌み子ではなく葵のほう

Chapter 1 Prelude 終了です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6112m/>

Story.01 白のプレリユード

2010年10月10日19時09分発行